『塾』の歩みをふりかえる

広報誌『塾』300号記念

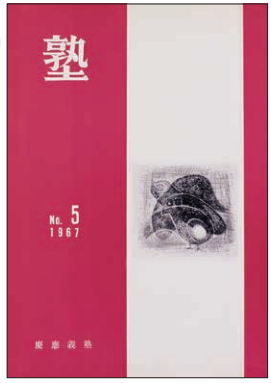
初めての東京オリンピックを翌年に控えた1963年に創刊された広報誌『塾』。
昭和から平成へと時代が移りゆく中、塾生とその父母・保護者、さらには塾員までをつなぐ広報ツールとしての使命を果たしてきた。今号で通巻300号となった『塾』の55年の歩みをさまざまな視点からふりかえってみる。

表紙デザインの変遷

半世紀以上の『塾』の歴史において、その"顔"ともいえる表紙デザインは、塾員の手を借りながら時代とともに変遷してきた。大きく5つの時期に分けることができる表紙デザインの来歴と特色について紹介する。

1963~1967
第1号～第20号

一色の色地のごくシンプルなデザイン。題字のほか、「慶應義塾」の文字と号数が記されているだけ。



1967~1975
第21号～第69号

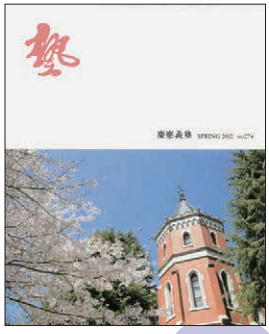
普通部出身の版画家・駒井哲郎（こまいてつろう）君（1920～76）が作品を提供。抽象画を中心に自然を描いた写実的作品などもあった。

1975~2000
第70号～第227号

経済学部出身の洋画家・清川泰次（きよかわたいじ）君（1919～2000）による描き下ろし作品。実に26年、158号の長きに及んで表紙を飾る。

2001~2005
第228号～第246号

21世紀初の『塾』の顔となったのは、日本を代表する影絵作家・藤城清治（ふじしろせいじ）君（1924～）によるキャンパス風景のスケッチ画。



2005~
第247号～

2005年夏号以降、現在に至るまで義塾各キャンパスで見られる四季折々の風景写真を表紙に使用している。

慶應義塾と社会の55年

1963
4月 『塾』創刊

1964
東京オリンピック

1965
1月 学費改定に反対し大学紛争始まる（2月 塾長提案を受け入れ終息に向かう）
4月 永沢邦男、塾長となる

1966
4月 この年の入学生から他大学に先駆け推薦入学（工学部）を始める
9月 『慶應義塾大学報』創刊

1968
5月 義塾命名100年記念式典挙行

1969
5月 佐藤朔、塾長となる

1971
9月 松下記念図書館竣工

1972
3月 工学部、日吉矢上台（矢上）の新校舎に移転
12月 学費改定反対紛争起こる（翌年6月日吉キャンパスでスト解除）
日中国交正常化

1973
5月 久野洋、塾長となる
第一次オイルショック

1974
5月 幼稚舎創立100周年記念式典挙行

1975
10月 学費値上げ反対運動起こる（1977年度からの物価スライド制導入を発表）

1977
5月 石川忠雄、塾長となる

1978
4月 大学院経営管理研究科設置（翌年12月ビジネス・スクール付設）
日中平和友好条約調印

1981
4月 大学工学部、理工学部となる

1982
4月 三田キャンパス図書館（新館）開館披露式挙行

過去の誌面ピックアップ

1967

1969

1963

3回にわたって実施された「学生実態調査」に基づき学部の教員が塾生の社会意識や生活観、塾生らしさについて話し合った座談会（第3号掲載）。

1965

写真を大きく使ったグラビア。モノクロ写真だからこそ伝わる学生たちの息吹や時代の空気を感じる。

1976

モノクロ時代の『塾』は、父母・保護者向けの広報誌だった（7ページ参照）。そのため父母・保護者が知りたいと思われる情報を主に文字情報によって提供していた。現在とは異なる当時の大学生気質や大学の社会的な位置づけなどを伝える慶應義塾の歴史資料となっている。

1983
5月　創立125年記念式典挙行

1984
5月　日吉キャンパス開設50年記念式典挙行
福澤諭吉肖像入壱万円札発行

1985
1月　日吉図書館竣工披露式挙行
2月　三田キャンパス大学院校舎竣工
男女雇用機会均等法成立

1987
5月　大学病院新棟開院

1988
4月　厚生女子学院生徒募集停止（1990年閉校）、看護短期大学を開校（2003年閉校）

1989
昭和天皇崩御
消費税導入

1990
4月　湘南藤沢キャンパスに総合政策学部・環境情報学部を開設
9月　大学部開設100年記念式典挙行
ニューヨーク学院（高等部）開校

1991
『短大・諸学校ニュース』創刊
ソ連崩壊

1992
4月　湘南藤沢中等部・高等部開校
8月　第1回オープンキャンパスを三田で開催

1993
5月　鳥居泰彦、塾長となる
欧州連合（EU）発足

1994
4月　大学院政策・メディア研究科開設

1995
慶應義塾大学ホームページ開設
阪神・淡路大震災

1996
4月　慶應カード発行

1998
長野オリンピック

1999
12月　矢上キャンパスに創想館竣工

2000
4月　新川崎タウンキャンパス開設

2001
1月　この月から福澤先生没後100年記念行事が行われる

300号記念『塾』の歩みをふりかえる

カラー化第1号の特集は慶應義塾の原点を見つめ直す「船出」。蘭学塾から本格的な洋学教育の場「慶應義塾」への発展を福澤諭吉の外遊体験を通して検証した。

1995

日本人初の女性宇宙飛行士である塾員・向井千秋さんと塾長、医学部長との鼎談。2度目のスペースシャトル搭乗後に行われた。

1999

Windows 95が登場した年、慶應義塾の教育・研究におけるコンピュータ利用についての特集を企画。

1995

2004

各界でグローバルに活躍する5人の塾員による「塾員リレートーク」。卒業後、長い期間を経ても変わらぬ親交ぶりが微笑ましい。

1995年から『塾』は24ページのカラー印刷になり、コンテンツもバラエティあふれるものになった。『塾』は名実ともに慶應義塾の顔と言える広報メディアに成長し、オープンキャンパスなどで受験生にも配布されるようになった。

2002
1月 日吉キャンパス来往舎（研究棟）竣工
FIFAワールドカップ日韓共同開催

2003
イラク戦争勃発

2004
4月 大学院法務研究科（法科大学院）開設
新壱万円札発行

2005
3月 三田キャンパス南館竣工
4月 大学院健康マネジメント研究科開設
『慶應SPIRIT』創刊

2008
4月 共立薬科大学との合併により薬学部・大学院薬学研究科開設
大学院システムデザイン・マネジメント研究科、大学院メディアデザイン研究科開設
5月 慶應大阪リバーサイドキャンパス開設
8月 日吉キャンパス協生館竣工
11月 創立150年記念式典挙行

2009
3月 日吉キャンパス第4校舎独立館竣工
5月 清家篤、塾長となる

2010
4月 湘南藤沢キャンパス20周年記念式典挙行
7月 福澤諭吉生誕175年記念式典挙行

2011
3月 三田キャンパス南校舎建て替え竣工
東日本大震災

2012
5月 三田キャンパス図書館旧館開館100年記念式典開催

2013
4月 横浜初等部開校
5月 慶應大阪シティキャンパス開設（慶應大阪リバーサイドキャンパスを移転）

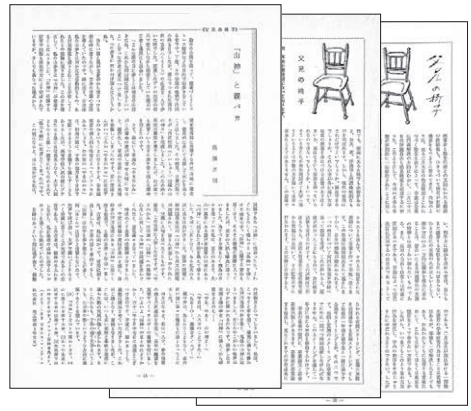
2015
10月 大学部開設125年記念式典・講演会開催

2016
4月 殿町タウンキャンパス開設

2017
5月 長谷山彰、塾長となる
4月 湘南藤沢キャンパスに看護医療学部開設
5月 安西祐一郎、塾長となる
鶴岡タウンキャンパス開設
アメリカで同時多発テロ

懐かしの『塾』コンテンツ

当時のコンテンツには、紙媒体として可能な限りのコミュニケーションを模索した先人の創意が感じられる。



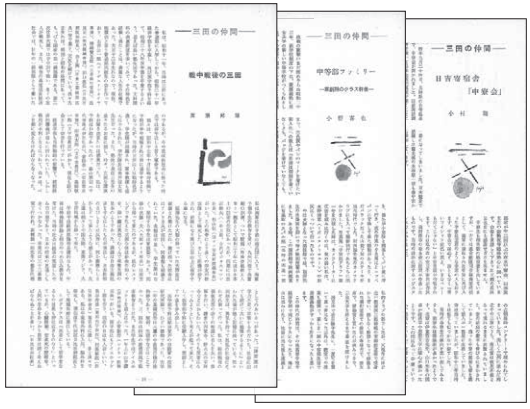
1963年4月号～1966年4月号掲載
1976年10月号～1988年2月号掲載

「父兄の椅子」

1963年4月号から1966年4月号までは、保護者から寄せられた大学生活上の相談に、義塾の担当者が回答するコーナーで、相談内容は学費の納入方法や転部の手続き方法、学生寮や奨学金など多岐にわたった。その後休載していたが、1976年10月号から復活し、保護者から塾生にまつわる内容を寄稿してもらうコーナーとして1988年2月号まで掲載された。

「三田の仲間」

塾生時代の友人との思い出について、塾員から寄稿してもらうコーナー。書かれているエピソードから、時代背景をうかがうことができる。なかには、学徒勤労動員を振り返り、1944年当時のキャンパスについて、「一割ほどしか残っていないので三田の学園はさびしい」と書かれているものがあった。



1972年4月号～1988年2月号掲載

「親子のコレスポンデンス」

保護者が塾生宛に手紙を書き、塾生がそれに返答する形でやりとりするコーナー。そこには現在と同じく、就職活動や学生生活を心配する保護者の姿や、人間関係や将来について悩む塾生の姿があった。SNSが発達していない時代における親子間の心のこもったやりとりが見られる。

1988年4月号～1995年2月号掲載

『塾』の変遷

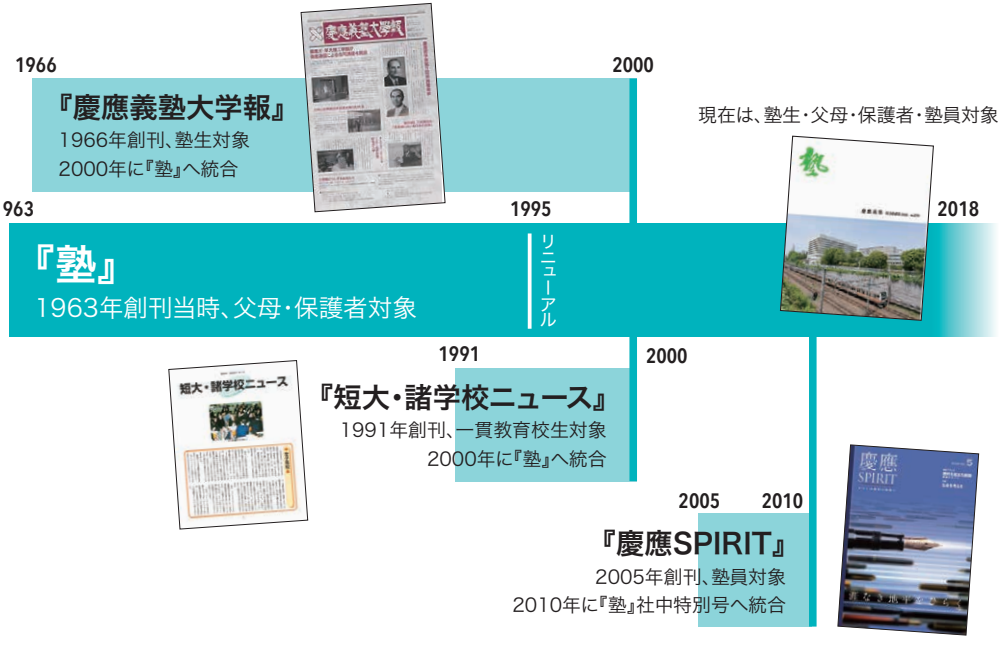
塾生、父母・保護者、そして塾員に向けたトータルな広報メディアへの進化。

１９６３年４月創刊の『塾』は、大学の姿勢や考えを父母・保護者へ直接伝える広報誌としてスタートした。当時、高度経済成長に伴う人口増により慶應義塾大学への入学者も急増。また、学生運動の興隆の中で、父母・保護者と大学の情報共有が大きな課題となっていたのである。１９６６年には塾生に向けて月刊新聞の『慶應義塾大学報』（以下、『大学報』）が発行された。これらは大学が発行する広報ツールとして草分けといえ、以後ほぼ30年間にわたり、この２つの誌紙が塾生、父母・保護者対象の広報を担っていくことになる。

１９９４年、広報室は広報誌のリニューアルプロジェクトを始動する。アンケート調査の結果も踏まえ、時代に合わせて誌面のカラー化・ビジュアル化、身近な話題を多く取り上げるなどの編集方針を定めたが、最も大きな変革は『塾』＝父母・保護者対象、『大学報』＝塾生対象というターゲット設定を見直し、『塾』を広く塾生とその父母・保護者に向けた広報誌に転換したことだろう。同時に『大学報』は速報性を重視した塾生向けニュースペーパーとなった。

１９９５年４月、「見て楽しい、読んでおもしろい編集」をモットーにリニューアル号（第１９０号）を発刊。従来のＢ５判から一回り小さくなり、現在のＢ５判変型になったのもこの時である。

その後、２０００年に『大学報』は『塾』に統合される。同時に一貫教育校の広報紙であった『短大・諸学校ニュース』も統合され、現在の『塾』のコンテンツである「一貫教育校の広場」が生まれた。２００５年には塾員を対象としたビジュアルマガジン『慶應ＳＰＩＲＩＴ』が発刊されたが、これも２０１０年には『塾』社中特別号にそのコンテンツを統合することになった。塾生、父母・保護者、そして塾員に向けた広報メディアとして、今後も『塾』は重要な役割を果たしていくことになるだろう。



塾生今昔

ヒサクニヒコが見た

Today 2018

『塾』の歴史の伴走者でもあるヒサ クニヒコ。1973年6月号の『塾』のために描いた塾生のイラストを再録するとともに、現在の塾生ファッションについて新たにイラストと文章で書き下ろしてもらった。

塾生ファッション雑感2018

ヒサ クニヒコ

今年の夏は暑かった。連日最高気温40度超えなんていうのが当たり前の夏だった。しかもその夏の長いこと。いつまでも暑い日が終わらない。そんな夏場にキャンパスを訪ねてみても、暑さ対策万全の軽装が闊歩するだけ。

でもその軽装が学生らしくて活動的に見える。夏休みに入る前の三田と休み中の日吉に行ったのだが、昔に比べて建物が増え、その分綺麗になっているのだが、キャンパス全体はやや狭苦しく感じてしまうのは、ＯＢの感傷だろう。

男子はＴシャツに半ズボン姿が実に多かった。まるで自分の部屋にいるのと変わらない。しかしＴシャツの柄と色の多様性は個性的だ。ちょっと前までの男子は、半ズボンは小学生までで、大人になって穿くもんじゃない、と頑なに思っていたはずなのが、いつの間にか夏の定番だ。これも温暖化のせいなのか？　女子学生も爽やかな軽装が目立って、好きなように好きなものを着こなしているという自由さが強く感じられた。確実に男子よりもセンスが良くておしゃれである。

実は今回学生のファッションを描くのは2回目。1回目はなんと今から45年前の１９７３年のことだ。この古い絵を発見した編集部が、45年前との違いを描いてくれとの無理な注文を出してきた。45年前を知る人などそうはいない。１９７０年に大阪万博が開催され、その余波でバブルに向かって高度成長という昭和真っ只中の時代だった。いきなりオイルショックが来てトイレットペーパーを買うのにパニックになったり、山口百恵、森昌子、桜田淳子の三人娘がデビューしたり……と言ったって今の若い読者には全くピンとこないはずだ。

男子は長髪で男女ともGパンが新しいファッションで、でも一所懸命「学生」を意識して服装を選んでいた時代でもあった。今の方がはるかに自然体で、意気込んだところがない。教科書などを入れるカバンはすっかり変わった。今は男女を問わずリュックタイプがほとんどだ。目いっぱいカバンを膨らませている学生も、ノートパソコンだけみたいなすっきりリュックの学生も、大事なのは両手がフリーになっていることのようだ。何しろほとんどの学生が片手にスマホ。これだけは昭和の学生と決定的に違うスタイルだ。

暑い夏が終わり秋が過ぎ寒い冬が来ようとも、リュック姿と片手にスマホかタブレットという姿は変わらないにちがいない。そして平成が終わっていく……。

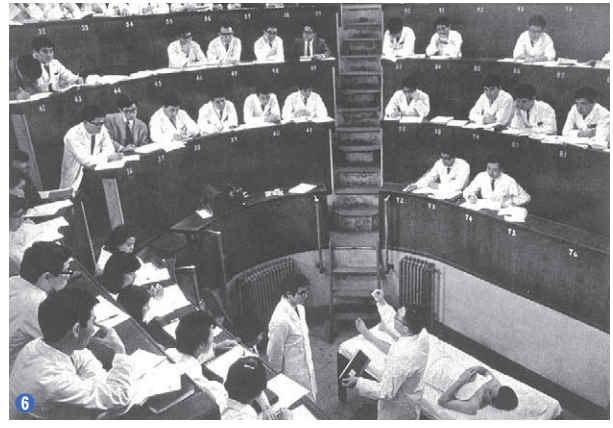


Photo Album

1960's~

❶1971年 入学式
❷1969年 日吉での新歓オリエンテーション
❸1988年 矢上でのコンピュータを使った授業
❹1988年 LL教室での外国語授業
❺1970年 図書館旧館前
❻1968年 医学部の臨床講堂での授業
❼1968年 入学試験風景
❽1988年 三田でのゼミ風景
❾1969年 学生団体の新入生募集ポスター
❿1970年 企画「塾長の一日」での佐藤朔元塾長(上野駅)
⓫1988年 三田の講義風景
⓬1971年 日吉での新入生歓迎風景